人と自然の情報交流誌
たてはく
第115号
2021.1.1
富山県［立山博物館］

立山曼荼羅特別公開展
立山曼荼羅に描かれた神の依り代
令和２年12月15日（火）～令和３年２月28日（日）

現在確認されている「立山曼荼羅」約50点から、テーマを設けて紹介している特別公開展。今年度は「神の依り代」に注目します！

「立山曼荼羅」には、嫗堂の近くに、柵やその柵に囲まれた「石」が描かれているものがいくつかあります。その中で、唯一「立山曼荼羅」佐伯家本に、この石が「影向石」と明記されており、神が降り立つ磐座（いわくら）〔＝神の依り代〕として描かれていることがわかります。

今回は、「立山曼荼羅」佐伯家本（個人蔵）と立山博物館Ｆ本（旧富山県立図書館本、国指定重要有形民俗文化財）と関連資料から、「立山曼荼羅」に影向石を描く意味について紹介しています。　（細木ひとみ）

「立山曼荼羅」佐伯家本（個人蔵）に描かれる影向石

場　　所　展示館２階　常設展示室（一部）
開館時間　9:30～17:00（入館は16:30まで）
観 覧 料　常設展示観覧料　一般300円（団体240円）
※大学生以下及び準ずる方、70歳以上は無料
会期中の休館日
月曜日（ただし、1/11は開館）、2/12（金）・24（水）

※1/12（火）～18（月）は設備修繕のため「展示館」はご覧いただけません。

目　次

立山曼荼羅特別公開展「立山曼荼羅に描かれた神の依り代」……1
新年あいさつ ……2
令和２年度 後期特別企画展「戦国武将と立山」を終えて ……2
山岳集古未来館資料紹介
堀田彌一資料から－ナンダ・コートの装備⑨　オーヴァーミトン(3) ……3
今年も県内の小学校で出前講座を開催しました!! ……3
令和２年度 文化講演会「戦国の争乱と立山―城郭が語る戦国史―」を終えて ……4
「E-BIKEによる称名滝満喫ツアー」開催 ……4
ボランティア教養講座「黒川遺跡群（上市町）」のキニナルを発見！……4
編集後記 ……4

新年あいさつ

館長
城　岡　朋　洋

2020年はコロナ禍の影響により計画していた多くの事業が中止・延期となりました。緊急事態宣言下にあった４月から５月にかけては約３週間という長期にわたる臨時休館を余儀なくされ、再開後も感染防止を徹底するために入館人数や団体客の受入制限、三密を回避することができないイベントの中止等、感染防止の対応に追われました。増加傾向にあった観覧者数は激減し、これまで当たり前と思っていた博物館の日常が一変した一年でした。

今年、立山博物館は創立30周年を迎えます。昨年追加指定され一段と価値の高まった国指定重要有形民俗文化財「立山信仰用具」をはじめ、霊山立山の文化財がもつ無二の魅力を伝える企画展を計画しています。ウィズコロナを意識した立山博物館の新しい魅せ方も模索しながら、感動を与え愛される博物館をめざし、なお一層努力したいと考えています。

今年も立山博物館をどうぞよろしくお願いします。

令和２年度 後期特別企画展 「戦国武将と立山」を終えて

立山山麓に残る古文書中に「富山県内の最古の古文書がある」という事実は、富山県民に意外と知られていないのではないでしょうか？もしそうだとすれば、その事をぜひ展示で紹介したい！それが本企画の原点でした。正平８年（1353年）、桃井直信は兄・直常とともに氷見で能登守護の吉見氏頼と激しい戦闘を続け、立山芦峅寺の僧侶に援軍を求める書状を送っています。この書状こそが富山県内の最古の古文書なのです。

本展では、南北朝期の立山山麓とその周辺からスタートし、戦国期をへて、前田家支配となるまでの歴史に焦点をあてました。寺嶋職定（もとさだ）、河上富信、佐々成政などの立山ゆかりの武将を肖像画や関連資料で紹介し、さらに池田城や中地山城、新宮山城などの戦国城郭とそれらに関わる古文書から立山山麓で生活していた人々がいかにして争乱の時代を生き抜いてきたのかを明らかにしようと試みました。当時の記録から、村の安全を守るべく、村の住民が武将との様々な駆け引きを行っていることがうかがえ、戦国の世を生き抜いた先人のたくましさを感じました。

今回、展示解説会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から人数制限、時間短縮など十分な対策を講じて実施しました。本展を開催するにあたり、企画展委員の高岡徹氏からは多くのご助言をいただきました。貴重な資料の出品にご協力をいただきました方々、ご観覧いただいた方々に深く感謝申し上げます。

（高野靖彦）

会場風景

解説会風景

山岳集古未来館 資料紹介

堀田彌一資料から－ナンダ・コートの装備⑨ オーヴァーミトン(3)

立教大學山岳部ヒマラヤ踏査隊（ナンダ・コート登攀隊）の装備。今回と次回は竹節作太の「高所用手袋」を参照する。

竹節は、早稲田大学商学部出身の新聞記者。在学中はスキー部で鍛え、1928年の第二回冬季オリンピック（日本初参加）ではスキー距離競技の日本代表を務めた。登山にも卓抜した技量を発揮し、1934年には立教大學の須賀幹夫と剱岳・早月尾根の厳冬期初登（12月25日）を果たす。そして２年後の1936年、竹節は、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社の特派員、かつ五人目の隊員としてヒマラヤ踏査隊に参加、立教大學の隊員とともに未登の頂を踏んだ。

竹節の登山装備は郷里の長野県下高井郡山ノ内町に遺るが、その中にナンダコート登攀装備の手袋二組がある。一組は皮革製三叉手袋、もう一組はサージ製二叉手袋で、前者は「ナンダコット一九三六　高所用手袋」と竹節が記した備忘紙片を伴う。名称はこの表記に依るべきだが、どちらもオーヴァーミトンそのものである。今回はまず皮革製三叉手袋を参照する（サージ製二叉手袋は次回）。

牛皮革オイルド・レザー製の外殻は、手首部分で縫合接続される手部と前腕前部からなり、手部では三枚接ぎ（ハギ）によって掌面・甲面の被覆と三つの指袋を、前腕前部では四枚接ぎによって楔形の襠を持つ袖筒を造り出す。装着時には手首と穿口を長短一対の平帯二組で締める。締具はピンバックルで、短帯の先に附属する。猫毛皮（未検証）の裏地は、襠裏を除き、指袋裏を含む裏全面に施される。

以上のとおり、竹節の皮革製三叉手袋は、前回参照した山縣一雄の「オーバー手袋（三本指）」（市立大町山岳博物館蔵）と同一の製品である。商標はなく製作者は不明だが、やはり美津濃配下の職人が携わった可能性は高い。

状態は左右で大きく異なり、右手用には示指袋・拇指袋先端の小さな切傷穴以外に目立った損傷はないが、左手用は掌面が著しく傷む。指袋部を含む掌面には並行に左上から右下へ斜行する複数の傷があり、掌中央では皮革が破損脱落して内張毛皮の裏が露出する。摩耗は、左右とも表面のほぼ全体に見られるが、これも、右手用では掌面に目立つ程度なのに対して、左手用では掌面や拇指袋・示指袋の腹側はもちろん、側面から廻り込んで三指袋・示指袋の背面に至るまで広く顕著である。左手用の損耗の様子を観察すると、手に巻いた（あるいは拇指－示指股に通し廻した）縄や紐の類いが擦過した痕跡と見える。具体的な状況までは判らないが、ザイル捌きや確保時に、左手に負荷の掛かる事態がしばしば生じたに違いない。竹節は右利きなので利き手側に負荷が掛かりやすいという理屈はここでは成り立たない。映画撮影という竹節の任務が影響した可能性はあるが、撮影機の操作自体が左手に強い負荷を与えることはない。竹節のアイモ（Eyemo）カメラは、手持ち撮影では通常、機体下のグリップを右手で保持し、左手が撮影に必要な操作を担う。そもそも三叉手袋装着のままでは細かい操作は難しかろう。あるいは竹節の左手は、撮影時の体勢支持に活躍していたのかも知れない。

竹節と山縣の、役目を果たして帰還した皮革製三叉手袋は、「高所用手袋」製作の過程で山岳部員ほかによる度重なる検討から生まれた一つの完成形、と考えてよいだろう。（吉井亮一）

竹節作太の皮革製オーヴァーミトン

写真上左：腹（掌）面観。写真上右：背（甲）面観。写真下左：穿口内面（右手腹面側裏面）。写真下中：穿口襠内面（右手小指側裏面）。写真下右：穿口襠外面（右手小指側表面）。

全長（穿口から示指袋先端または三指（中・薬・小）袋先端までの最大長）：31.5／31。全幅（指袋部最大幅）：11／12。手首接位置幅：11.5／12。穿口幅襠開［襠閉］：17／17.5［13.5／13.5］。楔形襠接寸法：8／8.5［穿口底辺］13.5（両辺同長）／13.5（両辺同長）［斜辺］。平帯［上］寸法（帯長×帯幅）：24×1.5（基部1.6）／24×1.5（基部1.8）。締金具附属平帯［上］寸法（帯長×帯幅）：1.5×1.5／2.0×1.7。平帯［下］寸法（帯長×帯幅）：31×1.5／30.5×1.5。締金具附属平帯［下］寸法（帯長×帯幅）：1.5×1.5／2×1.7。締金具［上］枠寸（長辺幅×短辺幅）：2.6×2.2／2.7×2.2。締金具［下］枠寸（長辺幅×短辺幅）：2.7×2.2／2.7×2.2。重量：133.5／134.0。以上の寸法標示は［右手用／左手用］、単位はcmまたはｇ。

＊竹節作太資料の写真掲載は竹節家の御厚意による。

博学連携

今年も県内の小学校で出前講座を開催しました!!

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で要望が少ない出前講座ですが、10月30日に立山町立高野小学校で開催しました。６年生を対象に、立山登山の事後の学習でしたが、特に要望されたのが、立山はもとより、室堂平や地獄谷などについて地学的な観点からの成り立ちについて知りたいというものでした。終了後も立山曼荼羅の複製を見ながら子どもたちは活発に質問していました。（鈴木博喬）

令和２年度 文化講演会 「戦国の争乱と立山―城郭が語る戦国史―」を終えて

今年度は、10月24日（土）、越中史壇会研究委員で城郭研究では県内随一の研究者である高岡徹氏を講師にお招きし、立山町元気交流ステーションみらいぶにて開催しました。

城郭に興味を持たれたきっかけから、富山県の歴史的背景を踏まえつつ、立山山麓を中心に戦国時代前後の武将の力関係や立地について詳しくお話しいただいたことで、城郭、中でも山城が歴史を彩る存在だったことを再認識できました。

なお、講演後に質疑応答の時間も設けたことから、より深く講演内容を理解していただけた様子で、参加者からは「非常に勉強になった」、「知らなかった歴史の一面に触れることができた」などの声が聞かれ、好評を博しました。

また、コロナ禍の中での実施であったことから、定員制の事前申込制としましたが、定員を上回る応募があり抽選を行うなど、当館でもまれにみる運営となりました。〔参加者45人〕（鈴木博喬）

「E-BIKEによる称名滝満喫ツアー」開催

去る11月７日、立山町観光協会が導入した電動アシスト付きマウンテンバイクによる、第１回目のツアーが開催されました。このツアーは、今年発売されたこの自転車で、称名滝までの高低差1,000ｍを走り抜けるというものです。当館もコースに組み込まれており、その一行が来館され、立山信仰の世界に触れ、当館も満喫していただきました。（鈴木博喬）

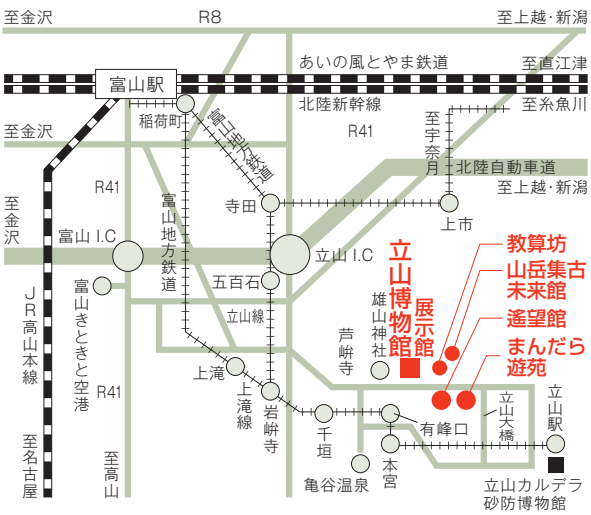
ボランティア教養講座 「黒川遺跡群（上市町）」のキニナルを発見！

９月26日（土）、三浦知徳氏（上市町教育委員会学芸員）を講師に迎え、上市町黒川遺跡群について学びました。弓の里歴史文化館にて黒川遺跡群の出土品を見学し、その歴史的価値を学んだ後、黒川遺跡群の中の黒川上山墓跡を散策しました。整備中の遺跡を前に、三浦さんが発見から国指定史跡となるまでの経緯を紹介されました。最初から携わっておられた方だからこそのお話も聞くことができ、楽しく有意義な時間を過ごしました。（森山義和）

編集後記

昨年は新型コロナウイルス感染症に振り回される一年でした。休館や企画・イベントの中止や延期はもとより、新しい生活様式にのっとったイベントの開催など、これまで経験したことのない出来事を次から次へと体験することになりました。とにかく、これ以上拡大せず、早く終息することを祈るばかりです。そんな中、いよいよ冬本番を迎え、山の高いところから伸びてきた白いものが山裾へ。コロナに負けじと雪への備えを日々整え、冬でも来館される方をお迎えできるよう準備万端！２月28日まで「立山曼荼羅特別公開」も開催中です。本年もよろしくお願い申し上げます。（鈴）

案内図



●最寄り駅
富山地方鉄道立山線千垣駅
下車徒歩（約２km）
※日曜を除き町営バス運行
「雄山神社前」下車すぐ

●自家用車で
JR富山駅から　約45分
立山駅（千寿ヶ原）から　約10分
富山インターチェンジから　約35分
立山インターチェンジから　約30分

立山博物館のホームページはこちらから。

人間と自然のかかわり方を学ぶ
富山県［立山博物館］
〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峅寺93-1
TEL 076－481－1216　FAX 076－481－1144
http://www.pref.toyama.jp/branches/3043/home.html
Facebookあります！ 立山博物館